

西堀 耕太郎

京都は着物がよく似合う街です。そして着物には和傘(主に竹と和紙でできた伝統的な傘)が一番似合うと思います。

しかし、昨今は着物姿を見かける事は少なく、まして和傘を目にする機会は伝統芸能の舞台か伝統行事ぐらいいでしょうか。

観光ポスターで舞妓さんが赤い和傘を差してほほ笑む写真や映画やドラマの劇中などで、非現実なイメージの中だけしか見る機会がないかもしれせん。

和傘の歴史は千年以上あり、奈良時代に仏教とともに伝来し、当初は雨具ではなく、

伝統は革新の連続

何と魔よけや高貴な身分を表す宗教道具であったようです。

開閉する事もできず、天蓋状の本体を竿からつり下げて使ったようです。その後、安



土桃山時代に開閉できるようになり、江戸時代以降は一般民衆が使う雨傘・日傘として全国に普及しました。実は同じ傘でも時代により用途や形状も異なっているんです。

ね。

しかし、明治初期には京都市内に200軒以上あった和傘工房も、既に弊社1軒だけになり、全国的に見ても10軒程度しか現存しない天然記念物のような存在です。作り手が少なくなりすぎたからか、古い大傘の修復やディスプレイ用など多くの注文を頂いており、工房は常にフル操業状態です。

12年前の12月には、京和傘のように開閉するデザイン照明を開発し、販売を始めました。最初の年はわずか2個しか売れず惨敗でしたが、今では売上高の65%は照明やインテリア商品に変わるまでに成長し、実は和傘そのものよりも制作点数は多いのです。

どんなものも最初から「伝統」として生まれるものはありません。時代の流れ、お客さまのニーズにあわせて「革新」を繰り返すのが自然な流れではないでしょうか。いつの日か和傘という言葉の意味は、「開閉できる明かり」を指す言葉に変わるかもしれません。かつて和傘が魔よけであったように…。

こう考えると伝統は「革新の連続」である事が自然な姿だと言えるでしょう。

にしほり・こうたろう 1974年、和歌山県生まれ。カナダに留学後、新宮市役所に勤務。妻の実家で京和傘の美しさに魅了され、傘職人に転職。2004年に「日吉屋」の五代目を継承。和傘の技を応用したデザイン照明で海外展開し、そのノウハウを生かして伝統工芸を支援する。